報告タイトル

# クルディスタンのマドラサの歴史と文化的影響

“History of the Madrasah in Kurdistan and its Cultural Influence”

氏名（所属）

阿部　達也（上智大学）

Tatsuya Abe (Sophia University Ph.D. student)

要旨（800 字程度）

本発表では、クルディスタンにおけるマドラサ(イスラームの伝統的教育機関)の発展の歴史と、マドラサがクルド人アイデンティティとクルド語文学の発展に与えた文化的影響に焦点を当てる。クルディスタンにおけるマドラサは、11 世紀のセルジューク朝以来のシャーフィイー法学派の学問的伝統を引き継ぎ、オスマン帝国領内のクルド系諸侯(ミール)の庇護のもとで独自に発展し、17 世紀以降には、エフメデ・ハーニーなどのウラマーによってクルド語の古典文学や教科書などが生産されることにより、クルド語（特にクルマンジー方言）の文語的発展が最初に誕生した環境となった。19 世紀のオスマン帝国の中央集権化政策によるミールの衰退後、ナクシュバンディー・ハーリディー教団のマドラサがクルディスタンの農村を中心にマドラサとタリーカのネットワークを形成し、19 世紀から現代に至るクルド社会の新たな学問的な権威となった。ナクシュバンディー・ハーリディー教団のマドラサは、それ以前のクルド人の学問的伝統を継承しつつ、クルド文学者のウラマーを養成しただけではなく、ウバイドゥッラー・ネフリー、シャイフ・サイード、サイード・ヌルスィーなどのクルド民族主義運動において重要な役割を果たした政治的指導者を多く輩出した環境でもあった。これらのマドラサは、トルコ共和国における 1925 年の教育統一法以後も、中央政府によるトルコ人同化政策と弾圧から逃れ、密かにクルド語による伝統的なマドラサ教育を存続させることで、現代トルコにおけるクルド語とクルド人アイデンティティの保護・維持において大きな貢献を果たしてきた。また 1970 年代以降には、政治難民としてスウェーデンに亡命したマドラサ出身のクルド人ウラマーの一部が、スウェーデンにおいてクルド語の古典的作品を数多く出版することによって、在外クルド人の出版活動の発展と書記言語としてのクルド語の「再興」に貢献している。